

徒然草

兼好法師

1 教材採録の意図

『徒然草』は日本古典文学の傑作の一つであり、人生の指南書として、あるいは優れた文学として、今なお読み継がれている。先人のものの見方や感じ方を知り、自らの生き方を振り返ることは、現代を生きる高校生にとって有意義なことであろう。そして、それらが古文の世界にとどまらず、現代の暮らしや感性にも通じるところがあると知ることが、今の自分が過去から未来へつながる大きな流れの中に生かされていることを感じ取る契機となるのではないだろうか。

ここでは、兼好のものの見方がよく表れているもの、自らの体験や日常生活と関連づけて読めるものとして、いくつかの章段を選び採録した。

「つれづれなるままに」(序段)は、随筆の本質を簡潔に言い当てている。基礎的教養として理解し、暗唱しておくべきものである。

「ある人、弓射ることを習ふに」(第九二段)には、無常観に基づく発想が見られ、身近な事例とも結びつきやすい。

「丹波に出雲といふ所あり」(第二三六段)には、現代の日常生活の中でも起り得るできごとが笑い話の体裁で描出されている。

「奥山に、猫またといふものありて」(第八九段)では、心理と事実との関係について考えさせることができる。

「ある者、小野道風の書ける」(第八八段)では、繰り広げられる理屈の

滑稽さ、筆者が観察した人間の心理や行動のおもしろさなどについて、自由な話し合いが期待できる。

「雪のおもしろう降りたりし朝」(第三一段)は、筆者の自然観や美意識、風流な態度についての評価を理解するのにふさわしい。

「神無月のころ」(第一一段)では、風景の中に発見した風流と無風流の対比を描いている。兼好が抱いたものと似たような感覚は、生徒の多くも経験したことがあるのではないだろうか。さらに「家居のつきつきしく」(第一〇段)と読み比べることで、兼好の美意識や洞察の深さに迫ることができる。

これら複数の章段を読むことで、古文独特の表現を学ぶとともに、古文の世界が自分たちの生活とつながるものであるということを知り、筆者兼好法師の自然や人間を見る目の鋭さや感じ方などを理解し味わうことをねらいとした。

2 作品の解説

① 書名

『徒然草』の書名が初めて文献に表れるのは、歌人の正徹の歌論書『正徹物語』(一四五〇年頃成立)で、「つれづれ草は枕草子をつきて書きたるもの也。」(佐佐木信綱『日本歌学大系』第五卷)一九五七年、風間書房)とある。成立から百年が経過しており、いつ頃からそのように呼ばれていたかについてはわかっていない。ただ、『つれづれ種』『津礼津礼草』『寂莫草』などの表記は見られるもの、書名に関しては他に伝わっている異称はなく、当初からそのように呼ばれていたと考えられる。

書名が序段冒頭の「つれづれなるままに」に基づくことは明らかであり、「草」についても、安良岡康作氏の「中世における『わらひぐさ』『なぐさめ草』などと同じく、自分の書きつけた原稿・文章を謙遜して言ったもの」(『新訂徒然草』一九八五年、岩波書店)という指摘は妥当であろう。

② 成立

室町時代の歌人、三条西実枝の『畷玉集』では、今川了俊が兼好の侍者であった命(松丸)に命じて、かつて兼好が住んでいた吉田の感神院の壁に張られていた反故や写経の裏書になっていたものを取り集め、ともに編集し『徒然草』と名づけたとするが、『畷玉集』は架空の書らしく、現在では否定されている。

成立論としてまず注目すべきは橋本純一氏の説で、文中の官職名や人物称呼から書かれた年代を考証し、一三三九(元徳元)年から一三三二(元弘元)年秋にかけてと推定した(『日本古典全書 徒然草』一九四七年、朝日新聞社)。これに対して西尾実氏は「はじめの三十段ぐらいは、その根

底になっている世界観からいっても、また文体からいっても、それにづく諸段と同じ時期に成ったものとは認めがたい程度のがいと感じられる」(『日本古典文学大系 方丈記 徒然草』一九五七年、岩波書店)として、成立を二期に分ける考え方を示した。この二つの説をふまえ、安良岡康作氏は序段から三二段までを第一部とし、それらは一三二九(元徳元)年までに執筆され、三二段以降が一三三〇(元徳二)年から一三三二(元弘元)年の間になり、その後一つにまとめられ、補筆・改訂があったとする説を唱え(『徒然草全注釈』一九六七年、角川書店)、現在ではこれが基本的に支持されている。

これらは逐段的に書かれたことを前提とする説であるが、後に段の入れ替えなどが行われたとする編集説もある。烏丸本と常縁本では章段配列が異なることや、兼好自撰家集との関連に注目するものである。後人の補修まで想定する藤原正義氏の説、兼好が最終的に全体を編集したとする細谷直樹氏、宮内三三郎氏の説が代表的なものであるが、いまだ定説となるには至っていない。

一三二八(文保二)年は後醍醐天皇即位の年で、皇室は大覚寺統と持明院統の二派が対立、一方で鎌倉政権との対立も深刻化し、一三三二(元弘元)年の元弘の乱、一三三四(建武元)年の建武の新政、そして南北朝動乱へと向かう時代の転換期である。この時期に『徒然草』を執筆した動機は、いかなるものであったか。後一条天皇の御子である邦良親王や、西園寺実俊などに進上するために書かれたとする貴顕献呈説もあるが、まだ十分に論証されていない。これに対し、当時は精神的にも乱世であり伝統的なものの価値が疑われかけていたとして、「文化の各面やもの見方・考え方などにおける王朝的な伝統の保持」を、彼(のような知識階級)にとっての至上命令であり、その気持・態度が、彼をして『徒然草』の執筆にかり立てたであろう」とする福田秀二氏の「危機意識」説(『徒然草の出典と源泉』『國文學解釈と鑑賞』432、一九七〇年三月、至文堂)は広く支持を得た。

徒然草

ある者、小野道風の 書ける			奥山に、猫またと いふものありて			丹波に出雲といふ所あり		
まとめ	展開	導入	まとめ	展開	導入	まとめ	展開	導入
3 筆者がどのような点に興味を感じたのか、話し合う。 課題①	2 「ある人」の指摘する内容を整理する。 課題①	1 第八八段を読み、大意をつかむ。	3 法師の心理状態を読み取り、法師についてどう思うか話し合う。 課題①	2 うわさを聞いた法師の心理が書かれている部分を抜き出す。 課題①	1 第八九段を読み、大意をつかむ。 課題①	3 最後の一文にこめられた筆者の思いについて話し合う。 課題①	2 上人の行動と心の動きを順を追って整理する。 課題①	1 第二三六段を読み、大意をつかむ。 課題①
● 直接書かれていない筆者の「ある者」への評価について考えさせる。	● 脚注を参照し、人物の生没年の関係を確認させる。 ● 係助詞「こそ」に着目し、結びについて確認しながら、指摘の内容を捉えさせる。 語句と表現	● 「ある者」の理屈の滑稽さに気づかせる。	● 思い込みによる誤解の例を想起させながら、考えを交流させる。	● 格助詞「の」、助動詞「なり」の用法を確認しながら、内容を捉えさせる。 語句と表現	● 「猫また」のイメージをもたせる。	● 批判や共感など、さまざまな意見を出させる。似たような体験や、その時に感じたことについて発表させてもよい。 語句と表現	● 人物の感情が書かれた部分を指摘させる。 ● 形容詞・形容動詞に着目して、心の動きを捉えさせる。	● 主語を確認しながら、内容を捉えさせる。

時間			学習活動		
まとめ	展開	導入	まとめ	展開	導入
4 筆者のものの見方・考え方について、自分の体験をもとに話し合う。 課題①	3 筆者がどのような心構えを説いているかを具体的に説明する。 課題①	2 第九二段を読み、大意をつかむ。 課題①	4 筆者のものの見方・考え方について、自分の体験をもとに話し合う。 課題①	3 筆者がどのような心構えを説いているかを具体的に説明する。 課題①	2 第九二段を読み、大意をつかむ。 課題①
● 根拠となる体験を明らかにしながら、自由に発言させる。	● 前半と後半とがどうつながっているかに注意させる。 語句と表現	● 助動詞「む（ん）」「べし」の用法を確認しながら、内容を捉えさせる。 語句と表現	● 随筆というジャンルについて理解させる。	● 助動詞「む（ん）」「べし」の用法を確認しながら、内容を捉えさせる。 語句と表現	● 随筆というジャンルについて理解させる。

② 学習指導の展開例

[3～5時間を想定]

- ① 評価規準
- 知識・技能 ① 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。(1)エ
- 知識・技能 ② 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。(2)ウ
- 知識・技能 ③ 時間の経過や地域・文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。(2)エ
- 知識・技能 ④ 我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解している。(2)カ
- 思考・判断・表現 ① 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。(Bア)
- 思考・判断・表現 ② 「読むこと」において、作品や文章に表れているもの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。(Bイ)
- 思考・判断・表現 ③ 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。(Bウ)
- 主体的に適切な態度 ④ 進んで文章の意味は文脈で形成されることを理解し、文章に表れているもの見方を捉えて内容を解釈し、学習課題にそって作品の内容について討論しようとしている。

4 学習指導の展開と評価

学びを広げる	
評価	<p>1 第一〇段を読み、大意をつかむ。</p> <p>2 第一一段と比較し、筆者の受け止め方の違いについて話し合う。</p> <p>知識・技能 (2)カ</p> <p>評価の実際▼ 古典作品を読み比べることで日本の言語文化への理解を深め、古典を読むことの意義や効用について理解している。 「行動の観察」 思考・判断・表現 Bウ</p> <p>評価の実際▼ 古典作品を読み比べて文章の展開や表現の仕方について評価している。「記述の確認」 主体的学習に取り組みさせる</p> <p>評価の実際▼ 文章の意味は文脈の中で形成されることを進んで理解し、文章に表れているものの見方を捉えて内容を解釈し、学習課題にそって作品の内容について討論しようとしている。「行動の観察」</p>
	<p>● 第一〇段と第一一段の共通点や相違点を指摘させ、筆者の美意識や無常観について考えさせる。</p>

神無月のころ		雪のおもしろう降りたりし朝			
まとめ	展開	導入	まとめ	導入	
評価	<p>3 筆者が「ことごとめ」た理由について、話し合う。</p> <p>知識・技能 (1)エ、(2)ウ・エ</p> <p>評価の実際▼ 古文の言葉や助動詞の用法などに注意して内容を読み取り、文章にこめられた筆者のものの見方や思いを捉えている。「記述の確認」 「記述の確認」 思考・判断・表現 Bア・イ</p> <p>評価の実際▼ 文章の展開を叙述を基に的確に読み取り、文章に表れている筆者のものの見方、考え方を捉えている。「記述の確認」</p>	<p>2 山里の庵の様子について説明する。</p> <p>課題①</p>	<p>1 第一一段を読み、大意をつかむ。</p> <p>課題①</p>	<p>3 最後の一文にこめられた筆者の思いについて話し合う。</p> <p>課題①</p>	<p>2 どのようなことが「口惜しき」なのか、説明する。</p> <p>課題①</p>
	<p>● 筆者の求める生き方について、自分の考えと比べながら話し合わせる。</p>	<p>● 助動詞「き」に着目し、筆者の体験が書かれていることをおさなさせる。</p> <p>● 和歌的な表現にこめられた意味を捉えさせる。</p> <p>語句と表現</p>	<p>● 各自の理想とする暮らしについて考えさせる。</p>	<p>● 手紙の相手が筆者にとってどのような人物であったかを考えさせる。</p>	<p>● 主語を確認しながら、内容を捉えさせる。</p> <p>● 助動詞「べき」の用法を確認しながら、内容を捉えさせる。</p> <p>● 自然に対する美意識や風流な態度について読み取らせる。</p> <p>語句と表現</p>

ある人、弓射ることを習ふに

1 大意

初心者が二本の矢を持つて的に向かうと、一本目をいいかげんに扱う心が生じるからよくない、と弓の師が弟子を戒めたが、このことは万事に通じる。仏道を修行する者でも、先々の時間をあてにしてしまう。一瞬の間にも存在する油断し怠る心に気づき、なすべきことをただちにすることは甚だ難しい。

2 構成

〈第一段落〉

初め、
47・2 「……わたるべし。」

弓を射る時に怠惰の心が生じること

弓を習う時に、「初心者が二本の矢を持つて的に向かうと、一本目をいいかげんに扱う心が生じるので、一本に集中せよ」と師が戒めた。そのつもりがなくても油断し怠る心が生じることを、師は気づいているのだ。この戒めは万事に通じる。

〈第二段落〉

47・3 「道を学する人……」
〜終わり

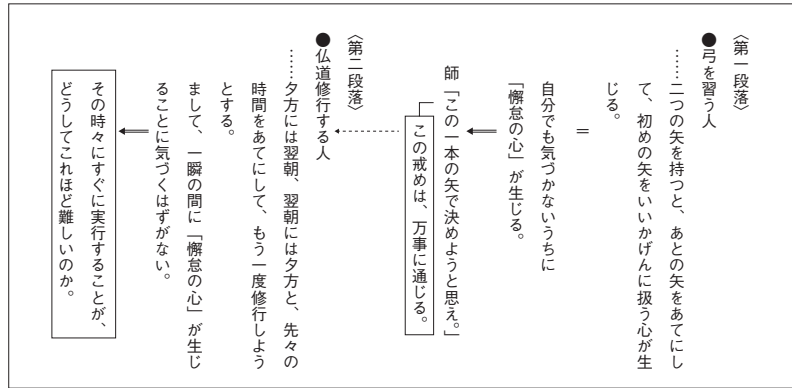
怠惰の心を抑えることの難しさ

仏道修行でも、先々に時間があると考えて、あとで修行しようと考えてしまう。まして一瞬のうちに油断し怠る心があることには気づかない。現在の一瞬においてただちに実行することが、どうしてこれほど難しいのか。

3 品詞分解と口語訳

諸矢	を	持	つ	を	射	る	こ	と	を	習	ふ	に
格助(対象)	格助(主格)	動(夕四・連体)	格助(対象)	動(夕二・連体)	格助(対象)	動(夕四・連体)	格助(対象)	動(夕四・終止)	格助(時間)			
諸	の	こと	の	こと	の	人	の	二	つ	の	矢	の
を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を
射	射	射	射	射	射	射	射	射	射	射	射	射
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ
と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を	を
習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習
ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
に	に	に	に	に	に	に	に	に	に	に	に	に

- 1 ある人が、弓を射ることを習う時に、二本の矢を手を挟み持つて的に向かう。
- 2 師が言うことには、
- 3 「初心者は、二本の矢を持つてはいけない。
- 4 (そうする人には) あとの矢をあてにして、初めの矢にいいかげんに扱う心がある(からである)。
- 5 (的に向かう) そのつとただ当たるか当たらないかと思ひ悩むことなく、この一本の矢で決めようと思え。」と言ふ。
- 6 わずかに二つの矢(であるのに、それを)、師の前で一つをいいかげんにしようと思うだろうか、いや、思わない。
- 7 (しかし) 怠心(が生じること)は、自分自身は気がつかなくても、師はこれに気づく。



- 46ページ
- 1 諸矢「的に向かう時に作法として持つ、二本一組の矢。」これを「一手矢」ともいい、初めに射るのを甲矢、後で射るのを乙矢という。1 たばさみて 手に挟み持って。甲矢をつがえる時、乙矢は指に挟む。
- 2 師のいはく 師が言うことには。「の」は主格。「いはく」は動詞「言ふ」の未然形に引用文を導く接尾語「く」がついたもの。
- 2 初心の人 初心者。
- 2 持つことなけれ 持つてはいけない。「なけれ」は形容詞「なし」の命令形で、禁止を表す。
- 2 なほざりの心 いいかげんに扱う心。「なほざり」は、本気ではなく粗末に扱うこと。ここでは、あとの矢があるから初めの矢は外れてもかまわないと考えること。
- ④「なほざりの心」とは具体的にどのようなか心か。
答 外れてもかまわないと考える、いいかげんに扱う心。
- 3 得失 「成功と失敗。」ここでは当たるか当たらないかという迷いの心。「得失なく」は、当たるか当たらないかと思ひ悩むことなく、3 定むべし 決めよう。「定む」は決着をつける意。

47ページ

1 おろかにせんと いいかげんにしようとする。
「おろかなり」は、いいかげんである、疎略だの意。「おろかに」は形容動詞「おろかなり」の連用形、「せ」は動詞「す」の未然形、「ん」は意志の助動詞。

「べし」「む」と「む」
「べし」は推量・意志・可能・当然・命令・適当。「む」は推量・意志・仮定・勧誘・婉曲・適当を表す助動詞で、共通するところが多いが、「べし」のほうがより強い意志や確信のある推量を表す。「む」の打消が「し」、「べし」の打消が「まじ」で、やはり「まじ」がより強い調子であることもあわせて押さえておきたい。

④「定む」とはどういうことか。
答 決着をつけるということ。

3 展開図

4 語句・文脈の解説

いへ	ども、	師	これ	を	知る。	8	こ
動(ハ四・已然)	接助(連接恒常)	代名	格助(対象)	動(四・終止)	動(四・終止)	代名	
の	戒め、万事	に	わたる	べし。			
格助(修飾)	名詞	格助(対象)	動(四・終止)	助助(当然・終止)			
道	を	学する	人、夕べ	に	は	朝	
9	格助(対象)	動(手変・連体)	動(四・終止)	格助(時間)	係助(区別)	動(時間)	係助(区別)
あら	ん	こと	を	思ひ、	朝	に	は
動(変未然)	助助(婉曲・連体)	格助(対象)	動(ハ四・連用)	動(ハ四・連用)	動(ハ四・連用)	格助(区別)	係助(区別)
夕べ	あら	ん	こと	を	思ひ	て、	
動(変未然)	動(変未然)	助助(婉曲・連体)	格助(対象)	動(ハ四・連用)	動(ハ四・連用)	接助(単接)	
重ね	て	ねんごろに	修せ	ん	こと		
動(ナ下・二連用)	接助(単接)	形動(ナリ・連用)	動(手変・未然)	助助(婉曲・連体)	格助(対象)		
を	期す。	10	いはんや	一刹那	の	うち	に
格助(対象)	動(手変終止)	副	動(変連体)	動(変連体)	格助(修飾)	格助(時間)	格助(区別)
において、	懈怠	の	心	ある	こと	を	知ら
連語	格助(修飾)	格助(対象)	動(変連体)	格助(対象)	動(四・未然)	動(四・未然)	動(四・未然)
ん	や。	11	なんぞ、	ただ今	の	一念	に
助助(推量・終止)	係助(反語)	副	動(変連体)	動(変連体)	格助(修飾)	格助(時間)	格助(区別)
において、	ただちに	する	こと	の	は	なほだ	に
連語	副	動(手変・連体)	格助(主格)	副	形(ラ・連体)	形(ラ・連体)	

8 この戒めは、万事に通じるはずだ。

9 仏道を修行する人は、夕方には翌朝があるようなことを思い、翌朝には夕方があるようなことを思つて、(その時に) もう一度丁寧に修行しようというようなことを思い定める。

10 ましてほんの一瞬のうちにおいて、怠け心があることを気づくだろうか、いや、気づかない。

11 どうして、今現在の一瞬において、ただちに実行することが(これほどまでに) たいへん難しいのか。

*おろかなり 「形動ナリ」①いいかげんである。おろそかである。②「いいいふもふも」などに続けて「言いつくせない。不十分だ。③愚かだ。④未熟だ。不器用だ。

1 思はんや 思うだろうか、いや、思わない。「ん」は推量の助動詞、「や」は係助詞の文末用法で、反語を表す。ここでは、文末に用いられて終助詞的なはたらきをしている。

④「思はんや」の「や」の文法的意味は何か。答 反語。

1 懈怠の心 「怠け心」前出の「なほざりの心」と同義である。

2 自ら 自分自身は。解釈に二通りの説がある。①副詞とする説……「自分の力では(気づかなくとも)」となる。

②名詞とする説……「自分自身は(気づかなくとも)」となる。

ここでは、「師これを知る」とともに「自分自身は気づかない」「師は気づく」と対比されていると解し、②に従う。

2 知らずといへども 気がつかなくても。接続助詞の「ども」は活用語の已然形に接続して、

①逆接の確定条件「…けれども、…ども」、あるいは②逆接の恒常条件「たとへども、…でも必ず」の意を表す。②は、ある条件の下ではいつも、後続のそこから予想される事柄に反する結果が成立することを表す用法

*ねんごろなり 「形動ナリ」①心をこめた様子。丁寧である。②親しい様子。仲むつまじい様子。③一生懸命である様子。一途な様子。

4 修せんこと 修行しようというようなこと。「修せ」は動詞「修す」の未然形、「ん」は文脈から考えて意志の助動詞。ただし、「こと」にかかる連体形であるから、婉曲の意を含んだ用法と解した。「修せん」は「学する」の言い換えである。

4 期す 思い定める。心づもりにする。本人は繰り返し学ぶことに意義を感じて思い定めるのであるが、実は先々をあてにする心がそこに生じていることに気づいていない、というのである。

④「重ねてねんごろに修せんことを期す」ことにはどのような問題があるか。

答 本人は熱心なつもりでも、先々をあてにする心が気づかないうちに生じているという問題。

4 いはんや まして。呼応の副詞で、文末の係助詞「や」と呼応する。「知らん」を修飾し、「まして……気づくだろうか、いや、気づかない」という意で、あとに述べる部分を高め強調する表現である。ここでは、普段から先々をあてにして怠ける心が生じていることに気づかないのだから、まして一瞬の間の

だが、そこから派生して、中世以降「たとへども」の形で逆接の仮定条件を表すことがある。

2 これを知る これに気づく。「これ」は、弓を射る人に懈怠の心が生じていることを指す。

④「これ」は何を指すか。答 懈怠の心が生じていること。

2 この戒め 師の「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。……この一矢に定むべしと思へ。」という言葉を指す。すなわち、自分でも気づかないうちに懈怠の心が生じるので、常にその時限りだと思って全力を尽くすべきだということ。

④「この戒め」の内容を説明せよ。答 自分でも気づかないうちに懈怠の心が生じるので、常にその時限りだと思って全力を尽くすべきだということ。

2 万事にわたるべし 万事に通じるはずだ。「べし」は当然の助動詞。前ページ「べし」と「む」参照。

3 道 仏の道のこと。①仏の道のこと。②学問・芸術・精神修養などのこと。

②二説あるが、ここでは『学道人(仏教において、仏道を修行する人)を釈したものとと思われる(前出「徒然草全注釈」)とする①に従う。

ことについて怠ける心が生じることに気づくはずがない、という意味になる。

④「いはんや」はどのような表現効果があるか、具体的に説明せよ。

答 普段から先々をあてにする心が生じていることに気づかないのだから、まして一瞬の間のことについて怠ける心が生じることに気づくはずがない、とあとに続く内容を強調する効果。

4 一刹那 「ほんの一瞬」という意味の仏教語。後出の「一念」も同じ。「刹那」は梵語。「劫(こゝろ)(きわめて長い時間)の対で、最も短い時間の単位。一指を弾く間に六十五刹那があるなどといわれている。

5 なんぞ どうして……か。疑問・反語の用法がある。

5 ただ今の一念 今現在の一瞬。「念」は「刹那」の漢訳。

5 ただちにすることのはなはだ難き ただちに実行することが(これほどまでに)たいへん難しいのか。「難き」は、文頭の「なんぞ」を受けて、文末が連体形となっている。「どうして難しいのか」という疑問ではなく、「どうしてこれほど難しいのか」と痛感し嘆く言葉である。

④「なんぞ、……はなはだ難き」には筆者のどのような気持ちが表れているか。答 その時々に行うことの難しさを痛感

④「道を学する」とはどういうことか。

答 仏の道を学ぶこと。仏道を修行すること。3 朝あらんことを思ひ 翌朝があるようなことを思い。「朝」は「朝(何かあった日の)翌朝」の意。ここでは、夕方に学んでいる人が翌朝のことを考えている。「ん」は婉曲の助動詞で、「こと」にかかる連体形である。

「夕べ」と「朝」 「夕べ」と「朝」については、「朝ニキテ道ヲ夕死ベシ可シ矣」(論語 里仁篇)や「あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるいは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。」(『方丈記』)を想起させる。ただし、本段の表現は「夕べ↓朝↓夕べ……」と繰り返されてゆくであろうところに妙味がある。

4 重ねて もう一度。その時になつてからまた、の意。「夕べ」「朝」というその時々にも学んでいるのだが、次の「朝」「夕べ」にももう一度学ぼうと考えるのである。

④「重ねて」とはどのような意味か。答 もう一度(その時になつてから)また。

4 ねんごろに 丁寧に。「ねんごろなり」は、丁寧に。一途だ。「ねもころなり」の変化した形。

し嘆く気持ち。

④ ある語を、同じ意味の別の語に言い換えている例を抜き出せ。

答 「なほざりの心」↓「懈怠の心」「学する」↓「修せん」「刹那」↓「一念」

5 「課題」の解説

① 次のそれぞれの場合、「懈怠の心」(47・1)はどのような形で表れているか。本文に即して、具体的に説明してみよう。

① 「弓射ることを習ふ」(46・1)人の場合。

② 「道を学する人」(47・3)の場合。

解答例

①あとの矢を頼みに思っ、初めの矢をいかけんに扱う心。

(矢がもう一本あることをあてにして、初めの矢は外れてもかまわな

いと油断する心。)

②夕方には翌朝があることを、翌朝には夕方があることを思っ、その時にもう一度修行しようと思っ心。

(夕方には翌朝があることを、翌朝には夕方があることを思っ、その時にもう一度丁寧によればよいと思え、今は十分にしないで油断する心。)

解説

①「懈怠の心」とは、油断し怠る心のことである。師の言葉によれば「のちの矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり」の「なほざりの心」である。どのように油断するのかをさらに具体的に述べれば、

「初めの矢は外れてもかまわな」と油断する心」となる。

②「こちらは「夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す」という心である。これもどのように油断するのかを具体的に述べるならば、「今は十分にしないで油断する心」となる。

6 「語句と表現」の解説

① 次の傍線部の助動詞の意味の違いを調べてみよう。

①ア おろかにせんと(47・1)

イ 思はんや。(47・1)

ウ 朝あらんことを思ひ、(47・3)

②ア 一矢に定むべしと思へ。(46・3)

イ 万事にわたるべし。(47・2)

解答例

①ア 意志 イ 推量 ウ 婉曲

②ア 意志 イ 当然

解説

①ア 直後の「と」は引用を表す格助詞なので、「ん」は連体修飾してない。さらに「おろかにせん」は弓を習う人が自分の態度について思っ言葉であるから、主語は一人称であり、意志の用法である。したがって「いかけんにしよう」との意となる。

イ 直後の「や」は反語を表す係助詞なので、「ん」は連体修飾してない。さらに「思はんや」は筆者が弓を習う人の行動について述べているのであるから、主語は三人称であり、推量の用法である。したがって「思っだろうか(いや、思わな)」の意となる。

ウ 直後の「こと」は体言なので、「ん」は連体修飾している。すなわち婉曲の用法であり、「翌朝があるようなことを思っ」の意となる。

②ア 「一矢に定むべし」は弓を習う人が自分の行動について思っ言葉であるから、主語は一人称であり、意志の用法である。したがって「この一本の矢で決めよう」の意となる。

イ 「万事にわたるべし」は筆者が師の教えについて述べているので

② 筆者のいう「懈怠の心」(47・1)についてどのように考えるか。自分の体験をもとに、話し合ってみよう。

解答例

略。

解説

「懈怠の心」の意味するところはすでに述べた通りであるが、その特徴は「自ら知らずといへども、師これを知る」「いはんや一刹那のうちにうちに生じているところにある。そのことをふまえて、筆者の考えが末尾の一文に端的に示される。「なんぞ、ただ今の一念において、ただちにすべきことをなすことは極めて難しい、という痛切な嘆きである。

人間誰しも油断して失敗したという経験はあるものである。随筆を学ぶにあたり、このような身近で現代に通じる話題についてそれぞれの体験を発表したり話し合ったりすることは、古文に親しみをもつきっかけにもなるであろう。「けっして油断してはいけない」という教訓として捉えるのではなく、「油断せずに実行するのは難しい」という人間の弱さに共感する姿勢でとらえ、自由に発言させたい。

あるから、主語は三人称である。さらに、筆者は「万事にわたる」ことが極めて自然であると考えているので、当然の用法である。したがって「万事に通じるはずだ」の意となる。ただし、これが強い確信にまでは至っていないと解釈する場合には、単なる推量として「万事に通じるだろう」の意となる。

7 読み深めるために

第一段落では弓を射る心構えを通して「懈怠の心」が気づかないうちに生じることを述べる。「自ら知らずといへども、師これを知る」というくだりは諸道の達人を称える系統の内容であり、「亀山殿の御池に」(第五一段)や「高名の木登り」(第一〇九段)などに通じるものである。また、それは万事に通じるものであるとして、第二段落では仏道修行する人を例にあげ、熱心であろうとしつとも気づかないうちに「懈怠の心」が生じることを述べる。そして「なんぞ、ただ今の一念において、ただちにすることのはなはだ難き」という慨嘆に至るのである。

兼好は「老来たりて、始めて道を「行ぜん」と待つことなかれ」(第四九段)、「大事を思ひたたん人は」(第五九段)、「⑧補充教材」参照)などで、将来をあてにして先延ばしにしてはいけない、死はいつ訪れるかわからないことを自覚せよ、と述べている。本段にもそのような無常の認識が表れているといえよう。夕方に翌朝を、翌朝には夕方を思っ人は、無常の自覚が欠けているのである。翌朝は迎えられないかもしれないと思えばこそ、現在できるだけのことをしようとする覚悟が生まれるのである。

ただし、それは難しい。修行者にしても繰り返し修行しようと考えているのであつて、今すべきことを怠ろうと考えているわけではない。それでも懈怠の心は生じてしまうのである。弓を習う人であれば、二本の矢を一本にすれば懈怠の心は生じないと思っかもしれない。しかし、練習だからという思いや、少しずつ上達しようという気持ちが生じれば、それは懈怠

8 読み深めるために

教科書本文「漁父之利」は、『戦国策』燕策の一節である。燕の昭王に仕えた遊説家である蘇代（官従策を説いた蘇秦の弟）が、隣国の趙の恵王を説得する際に用いた寓話である。

前二八四年、燕の南の斉を、燕の名將樂毅が軍を率いて攻め落とし、燕軍は斉にとどまった。（時代背景や位置関係については教科書168・169ページを参照。）そのとき、隣国の趙が燕の出兵の虚を衝き、燕に攻め入ろうとした。燕の昭王はそれを阻止すべく、蘇代を趙に遣わした。その際、蘇代が趙の恵王に向かって、燕への進攻をやめるよう進言するために用いたのがこの一節である。差し迫った状況の中で、蘇代は趙と燕の争いを蚌と鷗の死闘にたとえ、「燕と趙が長く争って民衆を疲弊させるならば、強国の秦が漁父のような立場となって、燕と趙を両方手に入れるということになりかねない。」と指摘する。恵王は納得し燕への進攻をとりやめた。なお、教科書本文のタイトル「漁父之利」の「漁父」という言葉は、教科書掲載部分には使われておらず、それに続く「臣恐強秦之為漁父也（臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり）」に初めて現れる。

『戦国策』燕策の教科書掲載部分の前後を、「⑨補充教材」にあげる。

9 補充教材

▼「漁父の利」は「鷗蚌の争い」といわれる動物寓話であるが、次の教材「虎の威を借る狐」（借虎威）の寓話と同様に、遊説家が君主の説得のために用いたたとえ話である。『戦国策』燕策の当該の一節を掲げておく。

趙且伐燕。蘇代為燕謂恵王曰、「今者

（教科書掲載部分）

今趙且伐燕。燕・趙久相支、以敵大衆。臣恐強秦之為漁父也。願王熟計之也。」恵王曰、「善。」乃止。

〔書き下し文〕

趙且に燕を伐たんとす。蘇代燕の為に恵王に謂ひて曰はく、「今者

（教科書掲載部分）

今趙且に燕を伐たんとす。燕・趙久しく相支へ、以て大衆を敵れしむ。臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり。願はくは王之を熟計せんことを。」と。恵王曰はく、「善し。」と。乃ち止む。

〔口語訳〕

趙が燕を討とうとした。蘇代は燕のために（趙）の恵王に言った。「今しがた、

（教科書掲載部分）

今、趙は燕を討とうとしています。燕と趙の両国がいつまでも張り合つて争い、それによって人民を疲弊させるならば、あの強国の秦が漁父（のような立場）となるのではないかと、私は心配いたします。王はどうかこのことをよくお考えください。」恵王は「わかった」と言い、そこで（燕を討つ）ことを中止した。

借虎威

1 教材採録の意図

「一 漢文入門」の単元では、漢文の基本的な構造とそれを訓読する技術について学んだ。それに続く「二 故事成語」の単元では、現在の日本語の表現として用いられる成語のもとになった短い文章を四編取り上げます。これらを何度も音読することによって漢文の文体やリズムに慣れさせたい。そして、訓点や書き下し文のきまりを確認すると同時に、簡潔で機知に富む漢文のおもしろさに興味をもたせたい。

さらに、漢文の表現が日本語の表現を豊かなものにしていくことも感じ取らせたい。

「借虎威」は、成語「虎の威を借る狐」のもとになった話である。有力者の権勢をかさにきていばる小人物の様子が、虎と狐のたとえを用いてわかりやすく述べられており、現代でも十分通じるものとなっている。「漁父之利」と同様に『戦国策』を出典としている。たとえ話が作られた状況や意図も併せて理解させたい。

表現としては、第一に使役の句法「使A B（AにBさせる）」の訓読および意味を確認させたい。次に、「敢」を用いた二種の句法の意味の違いに注意させたい。「無敢」（決して～するな）は禁止の句法であり、「敢不～乎（どうして～しないでしようか、いや、きつと～する）」は反語の句法である。「敢」と否定語「無」「不」などの位置関係によって意味が

違ってくることが理解させたい。

2 作品の解説

戦国策（せんこくさく）

本指導書「漁父之利」を参照。

3 参考文献

本指導書「漁父之利」を参照。

4 学習指導の展開と評価

① 評価規準

- 知識・技能** ①言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。(1)ア)
- 知識・技能** ②我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。(1)ウ)
- 知識・技能** ③文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。(1)エ)
- 知識・技能** ④古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。(2)ウ)
- 知識・技能** ⑤時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。(2)エ)
- 思考・判断・表現** ①「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。(B)ア)
- 思考・判断・表現** ②「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。(B)オ)
- 主体的に学習に取り組む態度** ①進んで、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解し、内容や展開についての確に捉え、学習課題にそって古典から受け継がれてきた表現の技法などについて調べようとしている。

② 学習指導の展開例

〔1時間を想定〕

第1時限		時間
導入	1 本文を繰り返し読み音読する。	学習活動
展開	2 語句・句法を確認し、話の内容を捉える。 3 「然」の示す内容を具体的に説明する。 4 話の主旨を理解する。 5 「虎の威を借る」が現在どのような意味で使われているかを調べ、本文の内容との関係について考える。	指導上の留意点 ● 範読のちに斉読・各自での音読を行い、訓点に従って正確に訓読できるようにさせる。 ● 訓読で注意する語や、「観」「見」の意味の違いを確認させ、全文を書き下し文にしたうえで、口語訳させる。 ● 直前の狐の言葉から読み取らせる。 ● この話がたとえ話であることを把握させ、何をたとえたものであるかを読み取らせる。 ● 国語辞典・漢和辞典を活用するよう指示する。
まとめ	評価 知識・技能 (1)ア・ウ・エ、(2)ウ・エ 評価の実際 ▼ 訓読のきまりや句法について理解を深め、文章が表している内容と、現在の使われ方について正確に捉えている。 「記述の確認」 思考・判断・表現 Bア・オ 評価の実際 ▼ 文章の展開を読み取り、話の主旨を的確に捉え、自分の考えをもっている。「記述の確認」 主体的に学習に取り組む態度 評価の実際 ▼ 進んで、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解し、内容や展開についての確に捉え、学習課題にそって古典から受け継がれてきた表現の技法などについて調べようとしている。「行動の観察」	

5 教材の解説

1 大意

狐が虎に食べられそうになった。狐は、天帝が狐を百獣の王にしているとして、虎を狐の後にして歩くことでそれを信じさせようとする。虎は百獣が逃げ出すのが、狐の背後にいる虎をこわがったこととは気づかず、狐の言葉にだまされてしまった。

2 全体の構成

初め 148・5 「……敢不走乎。」 148・6 「虎以為然。……」 く終わり	虎に捕まった狐 狐が虎に食べられそうになった。狐は、天帝が狐を百獣の王にしているとして、虎を狐の後にして歩くことでそれを信じさせようとする。
	百獣 狐を畏れる 虎は百獣が逃げ出すのが、狐の背後にいる虎をこわがったこととは気づかず、狐の言葉にだまされてしまった。

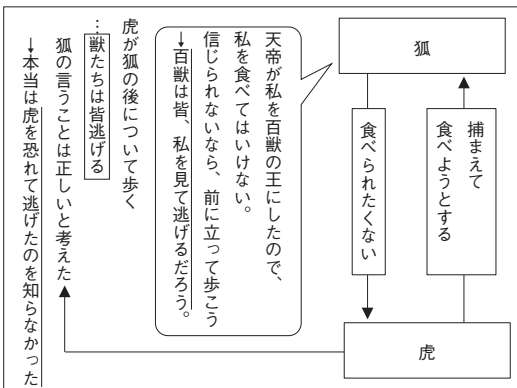
3 書き下し文と口語訳

<p>1 虎求百獣而食之。 2 得狐。3 狐曰、 4 「子無敢食我也。」 5 天帝使我長百獸。6 今、</p>	<p>1 虎百獣を求めて之を食らふ。 2 狐を得たり。3 狐曰はく、 4 「子敢へて我を食らふこと無かれ。」 5 天帝我をして百獣に長たらしむ。</p>	<p>1 虎は多くの獣たちを求めて食べる。 2 (ある時、虎が) 狐を捕まえた。3 狐が言うことには、 4 「あなたは決して私を食べてはいけない。」 5 天帝は私に百獣の王をさせているのです。</p>
---	--	--

<p>子食我、是逆天帝命也。 7 子以我为不信、吾为子 先行。8 子随我後觀。 9 百獸之見我、而敢不 走乎。」</p>	<p>6 今、子我を食らばは、是れ天帝の命に 逆らふなり。7 子我を以て信ならずと為 さば、吾子の為に先行せん。8 子我が後 に随ひて觀よ。9 百獣の我を見て、敢へ て走らざらんや。」と。</p>	<p>6 今もし、あなたが私を食べるならば、それは、 天帝の命令に逆らうことになりす。 7 あなたが私のことを信じられないと思うならば、 私はあなたのために先に立つて歩きましょう。 8 あなたは私の後についてきて(注意して)よく 見なさい。 9 獣たちが私を見て、どうして逃げないでいるで しょうか、いや、きつと逃げる。」と。</p>
<p>10 虎以為然。11 故遂与 之行。12 獸見之、皆走。 13 虎不知獸畏己而走也。 14 以為畏狐也。</p>	<p>10 虎は(狐の言うこと)を、そのとおりだと思った。 11 だからそのまま狐といっしょに行った。 12 獣たちはこれを見ると皆逃げた。13 虎は獣た ちが自分をこわがって逃げたことに気づかなかつた。 14 狐をこわがっていると思ったのである。</p>	

(戦国策)

4 展開図



5 語句・文脈の解説

148 ページ

1 百獣 多くの獣たち。「百」は、多く。
 1 而 置き字。ここでは接続のはたらきをし、「求めて」と送り仮名で示してその意を表す。
 5 行目、7 行目の「而」も同じ。

2 子 「あなた。」「し」と読む。
 2 無敢食我也 私を決して食べてはいけない。
 「無敢A」は「決してAするな」「禁止」。Aの部分の動詞は「Aスルコト」「Aスル」と連体形に読む。「敢」は「思いきって……する」という、強い意志をもって行うことを表す。ここでは従来「無」を「なカレ」と読み、禁止の意を表すことから、「敢」と合わせて強い禁止とした。「也」は文末で断定・確認の語気を表す。直前に読む「無」を「なカレ」と禁止にすると、助動詞「なり(也)」に接続できないので、ここでは読まずに置き字とする。読む場合には3行目・7行目のように「也」(なり)と訓読する。

2 天帝 「万物をつかさどる天の神。」上帝。
 2 使我長 私に王をさせる。「使AB」は「AにBさせる」「使役」。「使」の目的語Aは使役の対象となり、訓読では「Aヲシテ」の送り仮名をつけ、動詞Bは「B(セ)シム」と読む。
 *無「敢」一決してするな「禁止」
 *使「A B」△に回させる。「使役」

6 以為然 そのとおりだと思った。「以為A」は「A(である)と思った」。「以A為B」のA(狐が言ったこと)が省略された形。「以為A」とも訓読できる。「然」は、そうである、そのとおりである、の意。
 *以為【もつて なる】と読む

6 遂 そのまま。
 6 与 ……と(いっしょに)。(…)と(ともに)。(…)では返読して「と」と読む。
 *与【と】と読む

逃げるの意。

*敢不^{ハツシテ}走^{ハツ}乎 どうして()ないでいようか、いや、きつと逃げる。「反語」

7 畏 おそれる。権力や權威に威圧を感じておそればかる意。
 7 以為畏狐也 「以為然」と同様に、「以A為B」

5 敢不^{ハツシテ}走^{ハツ}乎 どうして逃げないでいるだろうか、()いや、きつと逃げる。「敢不A乎」は「どうしてA()ないでいようか、いや、きつとAする」「反語」「あへテA(セ)ざらんや」と読む。「敢不」と「不敢」とは意味に違いがあるので注意したい。「不敢A」は「あへテA(セ)ず」と読み、「決してAしない」という強い否定を表す。「走」は、

6 図版の解説

のAが省略された形。

149 ページ

・『成語故事』より 王英編『成語故事』(一九六五年、偉青書店(香港))より引用。
 [提供] シーピーシー・フォト

今^{イマ}もしくらば。「仮定」

3 以我为不信 私のことを信じられないならば。「以A為B」は「AヲもつてBトナス」と訓読し、「AをBだと思ふ」「AをBとする」の意味を表す。「不A」は、「A()ない」「否定」。
 4 観 じっくり見る。念入りに見る。観察する。「見」は、目に入る。

3 以我为不信 「為不信」とは、どういふことか。
 観 虎が狐の言うことを信じられないならば、
 *先行「と」はだれがどうすることか。
 観 狐が虎の先に立って歩くこと。狐が虎の前を歩くこと。

7 「課題」の解説

① 「然」(148・6)の内容を具体的に説明してみよう。

解答例

自分(虎)が狐について行き、獣たちが狐を見て逃げ出す様子を見れば、狐が天帝から百獣の王を命じられているということが信用できるということ。

解説

狐の言葉を受けて、虎は「そのとおりだ」と納得して狐の後について行く。狐の発言の後半「子以我為不信、……而敢不走乎。」の内容が解答の核にはなるが、「獣たちが狐を見て逃げる」ことが、「狐が天帝の命令で百獣の王を務めている」ことを証明することになるという要素を含めて解答をまとめる必要がある。

② 「虎の威を借る」は、現在どのような意味で使われているか、調べよう。

解答例

力のない者が権勢をもつ者の力を頼っていること。

解説

漢和辞典では「仮虎威」「仮」は借りの意」として見えることに留意。「虎の威を借る狐」として国語辞典にも確認させよう。

8 「語句と表現」の解説

① 「観」(148・4)と「見」(148・4)の意味の違いを調べ、その違いがわかりやすい熟語をそれぞれあげよう。

解答例

「観」意味：じっくり見る。注意して見る。 熟語：観察 観光 など
「見」意味：目に入る。 熟語：見聞 見物 など

解説

「観」は「じっくり念入りに見る」「見」は「それとなく見る。目に入る」という違いがある。まず、本文の内容からみてどのような違いがありそうか考えさせたい。その上で、漢和辞典を引いてそれぞれの意味を確認させ、違いがよくわかる熟語を選ばせるとよい。なお、「視」も「みル」と訓読し、「じつと見る」意で用いられるが、見方の度合いは「見」「視」、「観」の順で深くなる。

9 読み深めるために

教科書本文「借虎威」は、『戦国策』楚策の一節である。楚の宣王が家臣たちに向かって、「北方の国々が楚の宰相で將軍でもある昭奚恤を恐れているというわさは本当か」と問う。それに対する返答の中で江乙が用いた寓話である。

戦国時代、「戦国の七雄」といわれる国々が覇を競っていた(時代背景や位置関係については教科書168～169ページを参照)。その中で楚は、南方の長江流域で安定した勢力をもっていた。その楚の宰相かつ將軍として権力を握っていたのが昭奚恤である。この時、楚王のもとにいた江乙は、もともと魏から使者として楚に派遣された遊説家であった。江乙は魏のため

に楚の力を弱めようと画策していた。ここでも楚王と昭奚恤の間を割くべく、昭奚恤が宣王の力をかさに着てふるまっていると暗にそしている、ということができよう。王からの問いかけに、江乙は虎の威を借る狐の話を用いて答える。北方の国々が恐れているのは、狐(昭奚恤)ではなく虎(宣王)である。そして、あたかも昭奚恤が王を欺く性悪の狐であるかのように印象づけるのである。これと同様に、昭奚恤を陥れようとする江乙の言動が『戦国策』にはいくつか記されている。

本文「借虎威」だけを読むと、弱者が強者をうまくだまして自己の保身を図ったというように受け取れるかもしれない。だが、前後の文脈を考えると、むしろ、権力者の威光を背景にして実力以上の評価を得ている者を批判する意図をもっていたことがわかる。

『戦国策』楚策の教科書掲載部分の前後を、「10補充教材」にあげる。

10 補充教材

▼ もともと、『戦国策』楚策では、次のような場面の中で、たとえ話として引かれるものである。したがって、話の展開に言及して、何をたどっているかを考えさせることも、より理解を深める上で有効であろう。

荆宣王問群臣曰、「吾聞北方之畏昭奚恤也、果誠何如。」群臣莫对。江乙曰、

(教科書掲載部分)

今、王之地、方五千里、带甲百万、而專屬之昭奚恤。故北方之畏奚恤也、其美畏王之甲兵也、猶百獸之畏虎也。」

【口語訳】

(戦国時代) 荆(楚国の異称)の宣王が家臣たちに尋ねた。「わしは北

方の諸国が(宰相の)昭奚恤を恐れていると聞くが、本当のところはどうなのか。」と。家臣たちは答える者がいなかった。(遊説家の)江乙が答えて言った。

(教科書掲載部分)

今、王様の領地は五千里四方、兵力は百万ありますが、これを昭奚恤にまかせています。ですから、北方の諸国が奚恤を恐れますのは、実際は王様の兵力を恐れているのでして、(それは)ちょうど獣たちが虎を恐れたのと同じことです。」と。

二 故事成語

羅生門

芥川龍之介

1 教材採録の意図

高等学校の国語教科書の定番教材である芥川龍之介の『羅生門』については、これまで教科書の指導資料・研究論文・授業実践報告という形で、あるいは、担当する教員が培った独自の解釈という形で、教室という現場に向けてさまざまな〈読み〉が提起されてきたものと思われる。今回、『羅生門』を採録するにあたっては、特に次の点に留意して、教科書の脚注や「学習の手引き」を編成し、さらに「学びを広げる」を設定した。

- ①「平安朝の下人」という不安定な存在について、飢え死にをしようとする直前の状況にもかかわらず、太刀だけは手放さずとしないという点に注目して考察を試みる。また、その「下人」がどのような経緯で、「盗人」になっていったのかを解明する。
 - ②物語の時代性・社会性などにも配慮しつつ、これまで「下人」の視点からのみとらえられてきた事象についても、例えば、被害者としての「老婆」の立場になってとらえ直す作業をしていく。
 - ③物語の〈語り手〉を、近代のある時点において、ある「旧記」に問題意識を触発され、それを参照して、『羅生門』という物語を構成・再構成した存在と位置づける。その上で、素材としての『今昔物語集』や『方丈記』について、検討を加えていく。
- 「永年、使われていた主人」から解雇されて路頭に迷う状態、通常なら

ば〈交換〉されなかったようなもの（仏像や仏具を打ち砕いた薪、死人の頭髪を素材にしたかつら、蛇を原材料とした「干し魚」）が商品化されてしまうような社会、自分だけが生き残っていくために、〈弱者〉たる「下人」が〈弱者〉たる「老婆」を否定的に差別し、暴力的に抑圧してしまうような行為、これらは、物語の中の「ひととおりならず衰微していた」地域・時代だけに存在しているのだろうか。一見この閉ざされたかのような物語からも、我々の〈いま〉・〈ここ〉の問題が浮上してくる。〈他者〉への想像力ということに留意しつつ、〈語り手〉の説明（心理・情景描写）や登場人物の発言・行為について考察する。

2 作品の概説

1 作者

芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）

小説家。一八九二（明治二五）年、東京市京橋区（現東京都中央区）生まれ。第一高等学校第一部乙類（文科）、東京帝国大学英吉利文学科を卒業。大学在学中に久米正雄・菊池寛らと「新思潮」（第三次・第四次）を創刊。翻訳・小説・戯曲などを発表。一九一六（大正五）年、「新思潮」第四次（創刊号）に発表した小説「鼻」が夏目漱石の激賞を受け、文壇に登場する機縁となる。初期の作品は〈金草〉を舞台にした小説が多く、多様なスタイルの短編小説を試み、緊密な文体と知的な構成による作風とによって、人気作家となる。のちに作風を転じて、自己自身に材を求めた作品が書かれるようになるが、健康状態が悪化し、一九二七（昭和二）年に自殺。代表作には、「戯作三昧」（一九一七年）、「地獄変」（一九一八年）、「藪の中」（一九二二年）、「河童」「歯車」（一九二七年）などがある。

一八九二 （明治二五）	三月一日、東京市京橋区入船町（現中央区明石町）に、新原敏三・ふくの長男として生まれる。この年の十月ごろ、母・ふくが発狂したため、龍之介は母の実家である芥川家（本所区小泉町、現墨田区両国）で養育されることになる。
一九〇四 （明治三七）	八月、芥川家に養子として入籍し、芥川家の養嫡子となる。

1 小説

一九一〇 （明治四三）	三月、東京府立第三中学校を卒業。八月、第一高等学校文科に無試験で合格し、九月に一高に入学する。同級には菊池寛・成瀬正一・井川（恒藤）恭・松岡譲・久米正雄・倉田百三・藤森成吉・山本有三・土屋文明らがいた。	
一九一三 （大正二）	七月、一高を卒業、九月、東京帝国大学文科（英文科）に入学する。	
一九一四 （大正三）	二月、菊池・成瀬・松岡・久米らと第三次『新思潮』を創刊する。	5月「老年」 9月「青年と死」
一九一五 （大正四）	早春、吉田弥生との結婚を義父母と伯母に反対され、結婚を断念する。十一月、「羅生門」を『帝國文学』に発表する。この月、久米とともに夏目漱石を漱石山房に訪ね、以後、木曜会に出席する。	4月「ひよっこ」 11月「羅生門」
一九一六 （大正五）	二月、菊池・成瀬・松岡・久米らとともに第四次『新思潮』を創刊する。七月、東京帝国大学（英文科）を卒業、卒業論文は「ウイリアム・モリス研究」であった。十二月、海軍機関学校教授嘱託に就任する。 *十二月九日、夏目漱石死去。	2月「鼻」 5月「虱」 9月「芋粥」 10月「手巾」 11月「煙草と悪魔」

を使った比喩を用いて生々しく活写するとともに、獣性に満ちあふれた過酷な環境に身を置いて、本能的に生きていく「男」や「老婆」の存在のありようも示している。

「きりぎりす」や「からす」、動物を使った比喩についての具体的な効果については、「語句と表現」の解答例・解説で詳述したので、参照されたい。

5 小中学校教科書での扱い

中学校の教科書では、次の芥川龍之介の作品が教材として取りあげられている。

〔中学校〕令和3年度版
「トロッコ」三省堂1年・東京書籍1年
「蜘蛛の糸」教育出版1年

之介作品論集成（一九九九年～二〇〇一年、翰林書房）

2 学習者のためのブックガイド

- 芥川龍之介『藪の中』（二〇〇九年、講談社文庫）
- 『今昔物語集』（二〇〇二年、角川ソフィア文庫）
- フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキ、亀山郁夫訳『罪と罰』（二〇〇八年、光文社古典新訳文庫）

3 参考文献

1 指導者のための参考文献

- 関口安義編『芥川龍之介研究資料集成』全十一巻（一九九三年、日本図書センター）
- 宮坂覺編『日本文学研究資料新集19 芥川龍之介・理智と抒情』（一九九三年、有精堂）
- 志村有弘編『芥川龍之介「羅生門」作品論集成』（一九九五年、大空社）
- 関口安義『「羅生門」を読む』（一九九九年、小沢書店）
- 浅野洋編『日本文学研究論文集成33 芥川龍之介』（一九九九年、若草書房）
- 浅野洋・石割透・海老井英次・清水康次・関口安義・宮坂覺編『芥川龍之介』

4 学習指導の展開と評価

1 評価規準

- 知識・技能** ① 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。(1)イ
- 知識・技能** ② 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。(1)ウ
- 知識・技能** ③ 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。(1)エ
- 思考判断表現** ① 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。(B)ア
- 思考判断表現** ② 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。(B)エ

2 学習指導の展開例

〔3 時間を想定〕

時間	学習活動	指導上の留意点
第1時限	導入	
評価	1 読んだことのある芥川龍之介の作品について確認する。	●読んだ作品があれば、作品名や簡単な感想を発表させる。 ●適宜区切り指名して音読させ、物語の展開を確認させる。 ●印象に残った場面・描写について、自由に発言させる。 ●わからない語句は辞書で意味を調べておくよう指示する。 ●平安時代末期・秋・京都の羅生門・下人という存在などについて確認させる。
	2 本文を音読・黙読することを通して、物語の概要を理解する。	
評価	3 初発の感想を話し合う。	●相次ぐ災いによって荒廃していたことを理解させる。 ●荒れ果てて死体の捨て場と化していたことを把握させる。
	4 慣用句・難解な語句・漢字を確認する。	
評価	5 物語の背景となっている時代・季節・場所・登場人物などについて確認する。	●「記述の点検」
	6 当時の社会状況についてまとめる。	
評価	7 羅生門がどのような状態であったか把握する。	●「記述の確認」
	知識・技能 (1)イ・ウ	
	思考判断表現 Bエ	
	評価の実際▼作品に描かれている時代や社会状況を捉え、内容の解釈を深めている。	

善①この男が生きていることとする世界の入り口。②この男が、すぐにでもその世界に身を置くことができるということ。

13 夜の底 この男が門の下に座っていたのは「暮れ方」であったが、楼の内て展開された出来事の中に「夜」と呼ばれる時間帯へと移行しており、羅生門は「夜」の闇に包まれていたのである。この男が、楼の上からはこを駆け下りたのであるから、向かった場所は文字どおり、位置関係として下の部分である「底」ということになる。ただし、ここで「底」とは、そのものの奥深くにあつて、外からはうかがい知ることのできないもの（ところ）も意味している。つまり、「夜の底」とは、闇の深く濃い部分であり、闇によって隠蔽されている部分である。それはまさにこの男が生きていることとする世界のありようを端的に示している。

16 しばらく、死んだように倒れていた老婆が、……門の下をのぞきこんだ この部分の老婆の行動は、盗人と化した男の機敏な動きとは対照的に、きわめて緩慢なものとなっている。飢え死にをしないためにやむを得ずしていた行為の最中の降ってわいたような災難によって、悲惨なことに精神的・身体的・物理的に被害を被ることとなり、まさに虚脱してしまつた状態にあることを示している。

216ページ

2 黒洞々たる夜 底知れぬ洞穴のような暗黒の夜ということ。そこにいるはずもない男の姿を求めた、暗澹たる思いの老婆が目にした世界であり、同時に、盗人と化した男が溶解してしまつた世界である。

4 下人の行方は、誰も知らない（語り手）
「作者」は、自分が何ができるかを発見した男のあるべき可能性について、まったく言及することをせずに物語を結ぶ。

末尾一文の改訂の問題

『羅生門』の末尾部分について、初出形では、「下人は、既に、雨を言ひして、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた」とあり、第一創作集『羅生門』所収形では、「下人は、既に、雨を言ひして、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた」とあつた。それが、『新興文藝叢書第八編 鼻』において、「下人の行方は、誰も知らない」と、現行本文形に改変されたのである。初出形および『羅生門』所収形では、一連の出来事を経て、閉塞状況を打破した男が、「強盗」という新たな立場を獲得し、「夜」という時間や「雨」という外的環境もいっさい構わず、獲物が存在している「京の町」へと向かっているという「下人の行方」

が提示され、自分が何ができるかを発見し、その中で生きていく男の物語として定立しているのである。しかしながら、それが現行本文形では、自分が何ができるかを発見した男のあるべき可能性を書きおくことのできなかつた作者（構作者）の物語へと転位してしまつているのである。

5 図版の解説

207ページ

羅生門復元模型 「写真提供」京都文化博物館
『羅生門』初版本表紙（1917「大正6年」）
阿蘭陀書房刊。「写真提供」日本近代文学館

6 「課題」の解説

① この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写に注目し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。

解答例

京都では、この二、三年の間に、地震、辻風、火事、飢饉などの災いが続いて起つたため、洛中のさびれ方はひととおりではない。仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売つていたりする始末で、物資が不足し、経済的にも疲弊し、人々の心も荒廃していた。その結果、羅生門も荒れ果ててしまひ、狐狸や盗人が棲むようになり、ついには引き取り手のない死人を捨てるための場所となつてしまつて、人々は気味悪がり、暗くなると門の近所へは足踏みをしないようになっていた。そうした荒廃した社会状況の中に下人や老婆は身を置いている。

解説

平安時代末期（一一八〇年ころ）の京都の町の荒廃について、〈語り手〉は、福原遷都や戦乱（源平の争い）などの史実を排除して（人災については言及することなく）、不可抗力的な「地震とか辻風とか火事とか飢饉」（204・6）という天災が立て続けに起つたことを要因としてあげている。まさに「どうにもならない」という状況を設定したのである。また、「洛中のさびれ方はひととおりではない」（204・7）例として鴨長明の『方丈記』の記述を借用して、「仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売」（204・8）と描写する。ただし、借用するにあたっては、原文にある古寺に行つて仏像を盗むという部分を削除している。その意図するところは、仏像・仏具などの信仰の対象が単なるモノ化されて、もともとそれが何であつたかわかつても躊躇することなく燃料として売買する者、それを傍観する者の存

在を浮上させ、京の町に住む一般の人々の心の荒廃に焦点を当てるためである。平安京における権威や秩序のひとつの象徴でもある羅生門が損壊したままになっているのも、その一例なのである。結果、荒れ果てた羅生門に対して、「妖怪変化や忌まわしい者の存在する場所」という情報が洛中の人々に伝わり、漠然とした恐怖心から、「足踏みをしないことになつてしまつた」（205・3）状況が出来た。その上、洛中の人々も浅ましい現場を目にしたことはある不吉なものを連想させる「からす」の存在もそうした状況に拍車をかけたのである。要するに「作者」は、「主人」が雑役に使つていたこの下人のような取るに足らない存在までも抱えておくことができない（交換できない）ほどに疲弊した状況、神聖なるもの・醜穢なるもの・食材として認知されないものなど、通常においては貨幣と交換されないようなものが商品化されてしまつたという荒廃した社会状況を設定しているのである。

本文に示された京都の町や羅生門の様子に関する記述内容に注意してまとめる。前段階の作業として箇条書きにして整理するとまとめやすくなるだろう。

② 下人が羅生門の下に至るまでの経緯をふまえ、門の下での下人の心情についてまとめてみよう。

解答例

下人は、京都の町における衰微の余波を受けて、永年使われていた主人から四、五日前に暇を出されてしまひ、新たな主人を探し求めるものそのままならず、行き所もなく洛中をさまよい歩いてきたところ、少し前の申の刻下がりから突然降りだした雨に降りこめられてしまひ、やむを得ず羅生門の下にやつて来たのである。強い雨のため、そこから出ようにも出られない下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしなければならぬ事態——とりあえずは食い物の確保ということ——に直面して

一 小説一